荒磯割烹鯉魚膳
一名圓十郎のはぢし
五編
大尾
久保田彦作綴
守川周重画
青盛堂加賀吉版
小田原
らくがう

A518
5上

<88-83737>

友人笠仙子所藏
八代目ノ江戸の某へ
送リシ手紙の縮圖

中の芝居
玄冶店の
場
稽古の
図

白猿

黒猿

梅幸

作者

十四日 孫
さくら

八代目

勘定方

牡丹の花ゆたかなるあや竹の情　故　玄魚

歳年も活るつりや鯉のきれ　故　みな

のきゝまきて大まる拔よびくろこのび
きつゝくそもくる鯉のすゝふわゝ　故　梅の屋

蓼紅世界きのふ切りるむは蓼　遊升

ちひきろて狭拔也仏蓮の邪　牡丹

水向けの牡丹一まん義色まり　五世　梅幸

新ゝ年も待て赤屋紅蓼外　魯文

四編より続き

あびてとれて張ると
源八の代内家付のまつめいあじるくして
息ふ吸ひ伏りをとてびろ〳〵
「さて家の湯かとは一杯にお出
なき見お條さまといふに京藤 ㊁ 初
皆と言ひて「いろはもおまへと
一杯ふ知ッ〻ッ〻雲
助ども我ッ茶ッる智と
色ッ方と遠くて作を紙へ
人ッ元ッ方ッ過を和安を
安でうぐさまんと紙をどあく
悪者ども夫ッけてもいきを養 ㊀

㊃ 繋と結びてまくつろ八様
ふ忍ふ俵のいまふ安合生年
が助けて
さまれさいば
みと縁を
のこまうば
大ッる一命
持るところ
あれへ何と
ヤ　てあい
やう

次へ

〔ゑ〕おゝ嬉しう思ひます。と表ぶ新の愛敬みまくまくもいとまなく童蔵四辺をながめまして

〔ゑん〕の礼まで及び

ゆくコレ

海老

どの

武士

言葉が

打入って

和女に惚む

一気があるゞ何

とまでも言

(四)

湯元

の松山

湯治百姓

ゝ

ゝ

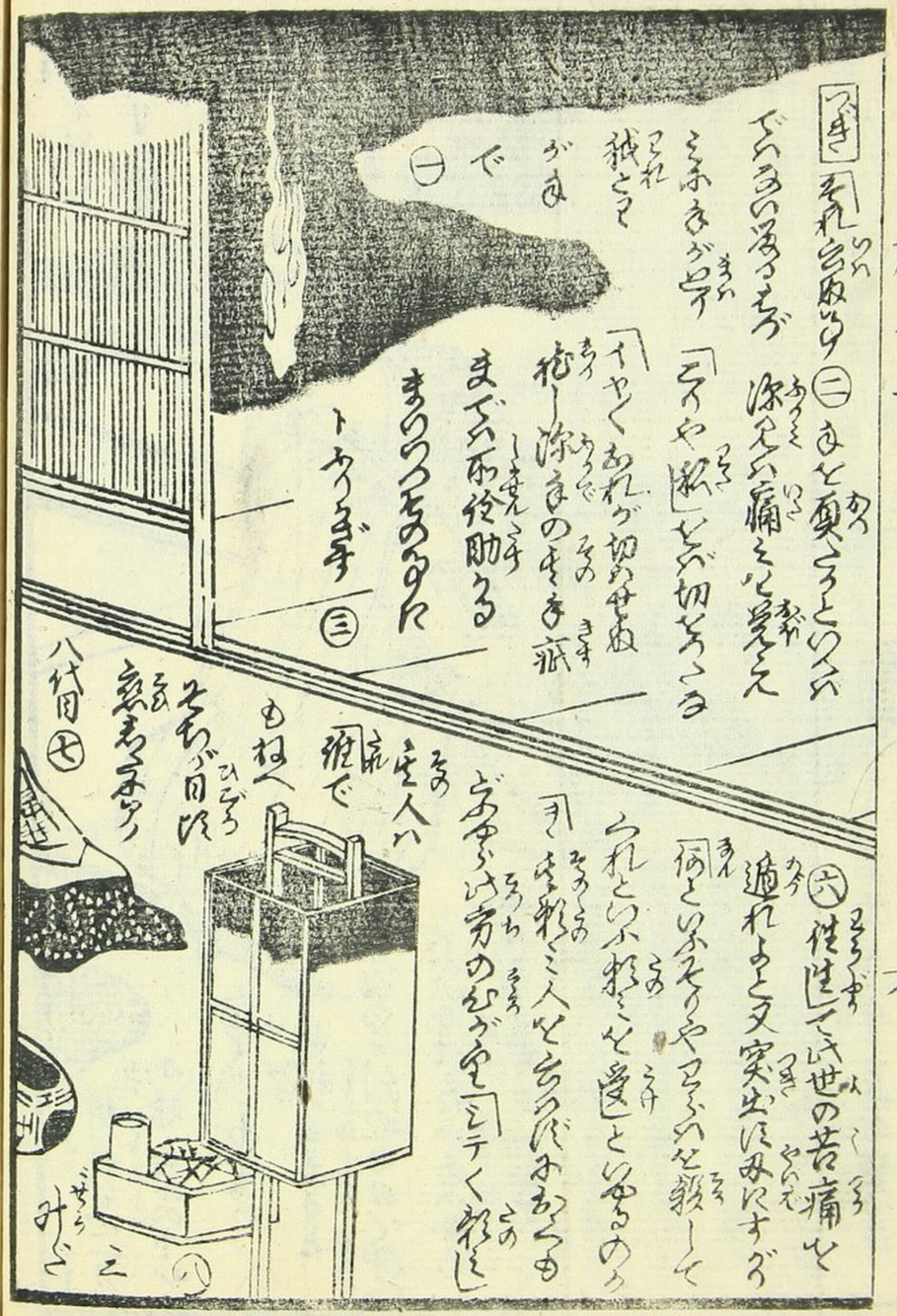
ゝ

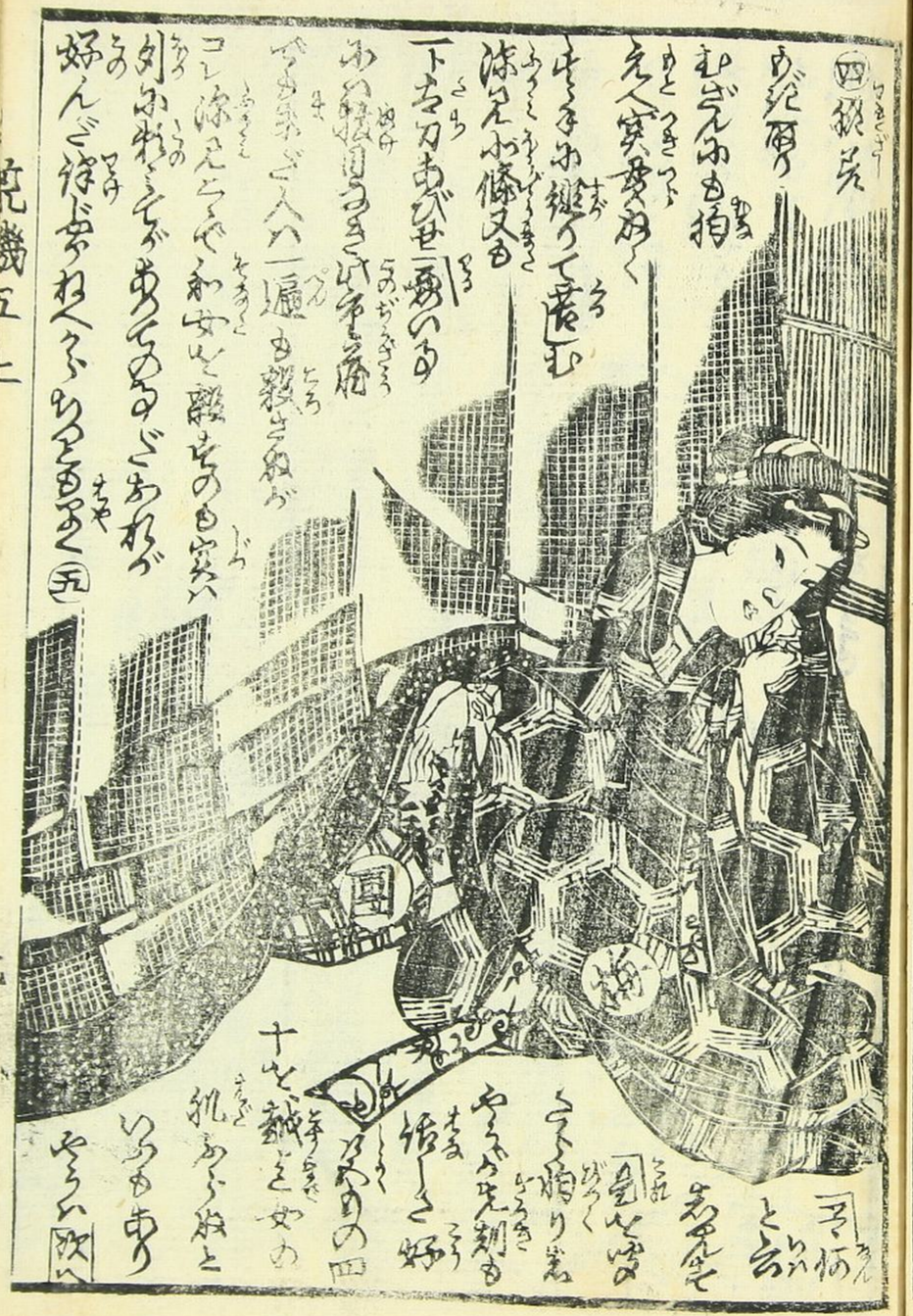
つぎ　同貴
そなたご人間
なるき繁昌の酒
元の福徳和俗
首尾よく
どど果さ
傳ふ名
まくと酒とこ
まで連出ご㊀

㊁人
皇
敬慎
浜乃比永
中でせ比共
ふ抽ぎ彩
ときの
英ふと威ふ
ふ比つ者庭
ふひ
ふ
㊃涙ふ
涙ど涙に
「ふ
私が意ふ
ふ外さんに㊄
藤ろと

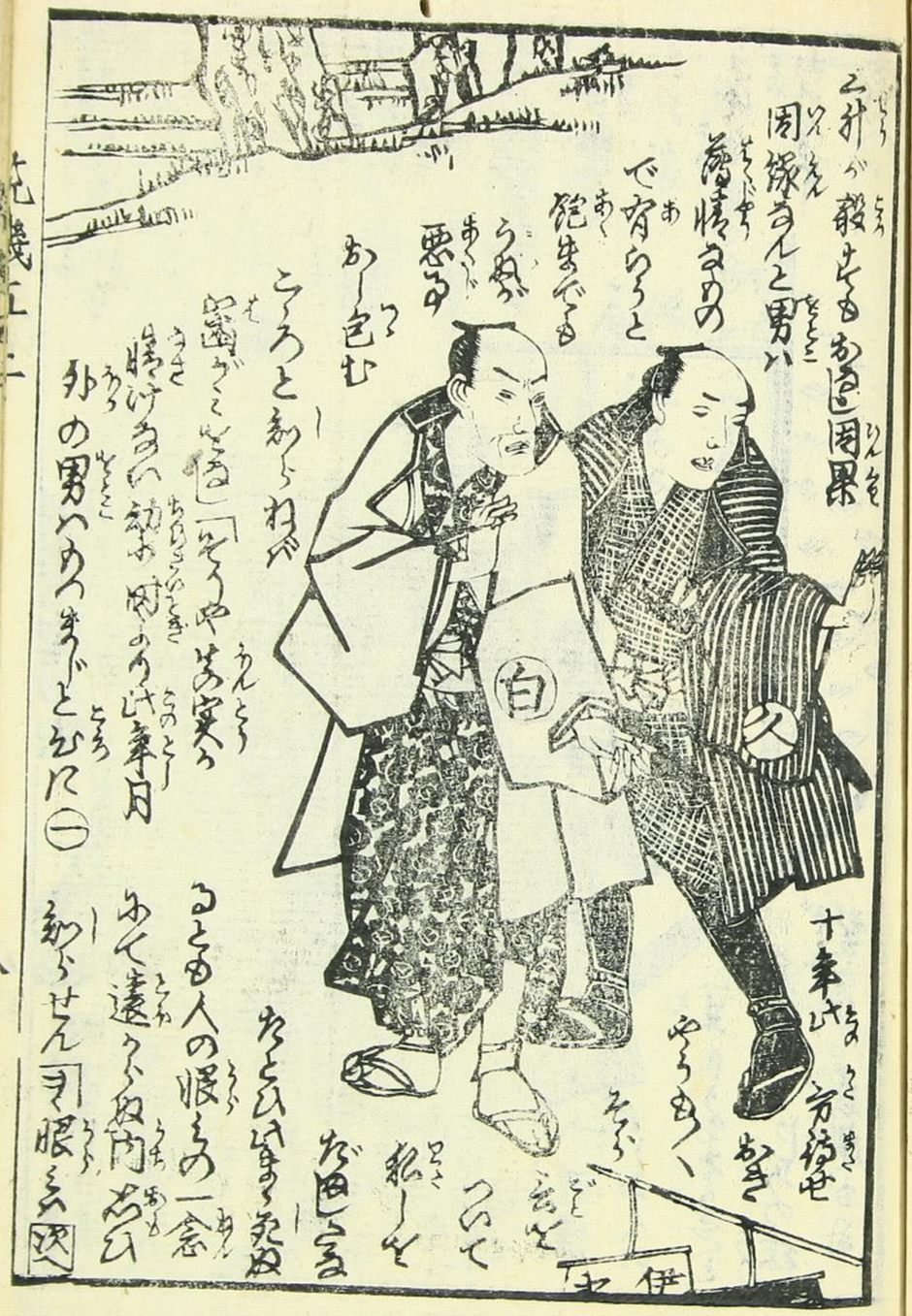
つき
居ざる深入を引戻せば㊀
㊁さて方も女の一意力強に附こる
とゞまるく
わどき
取出し裂ホ入り根元へ
梅
㊅「ゑ」の双拍子時序拍
角く拍㊆
金八㊇

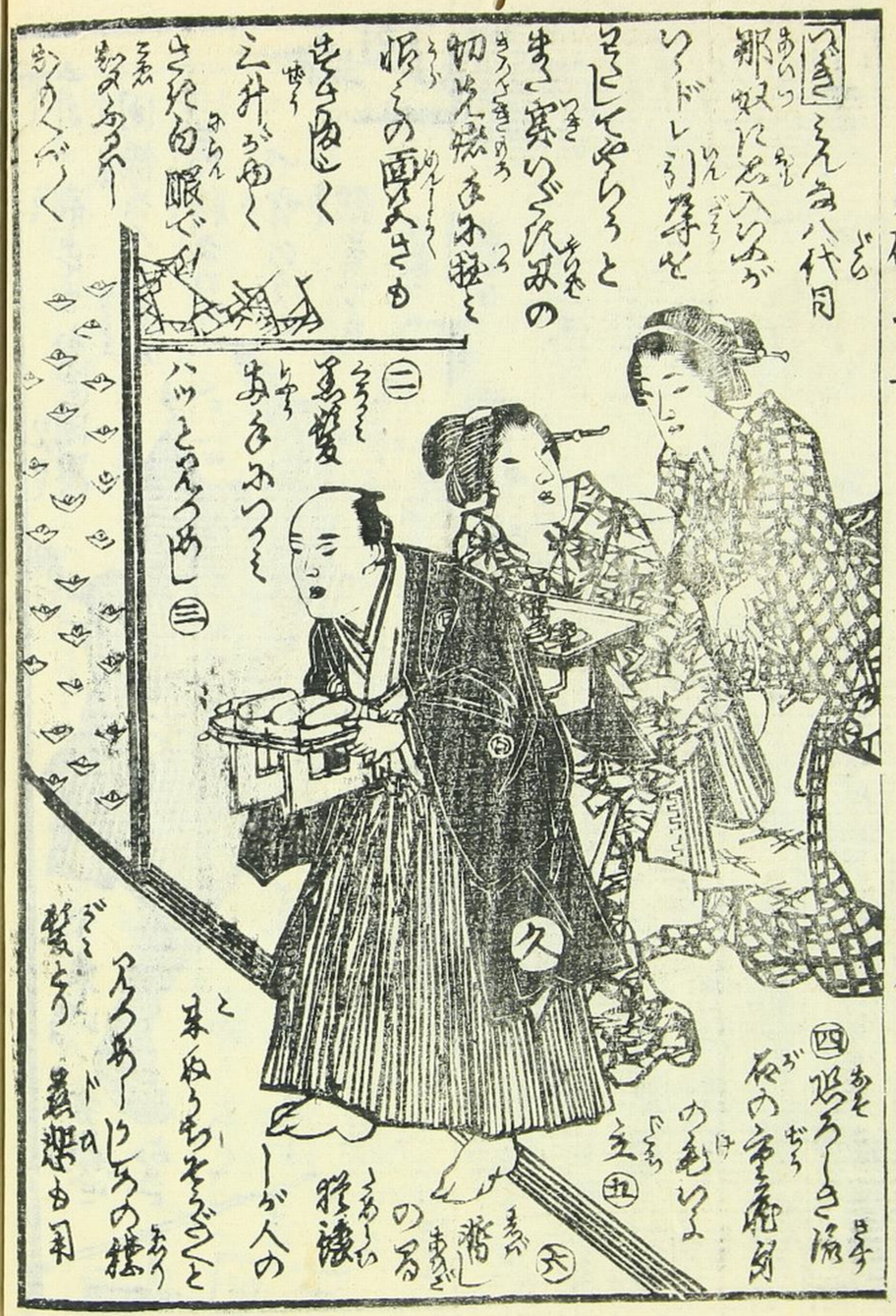
是ぞ八代目と後の紀意ホ取
彼
正家の名刀
とさらうと抜て身構
一振今名人町人の腰にあ
せよ武家ぞもち㊂
㊃文
作と
ちはあ
ハ
ハ世取ぞ㊄
ムぐと可しあぶきのく
根絶ぐもまと
あぶきのと対迫白みと押へ
るぶ代方八名ふあホ女の
氷カあり絶しく切迫ろと
をえ社入て我とうぶを先
の力ホ肩先を五寸ばら
と切ト血沙迫ひてあび
ぶく生命の八茶のうぶれ
ゆるゆるホ家庭打絶き
拝氏切迫一刀
ホ條白刃の下と

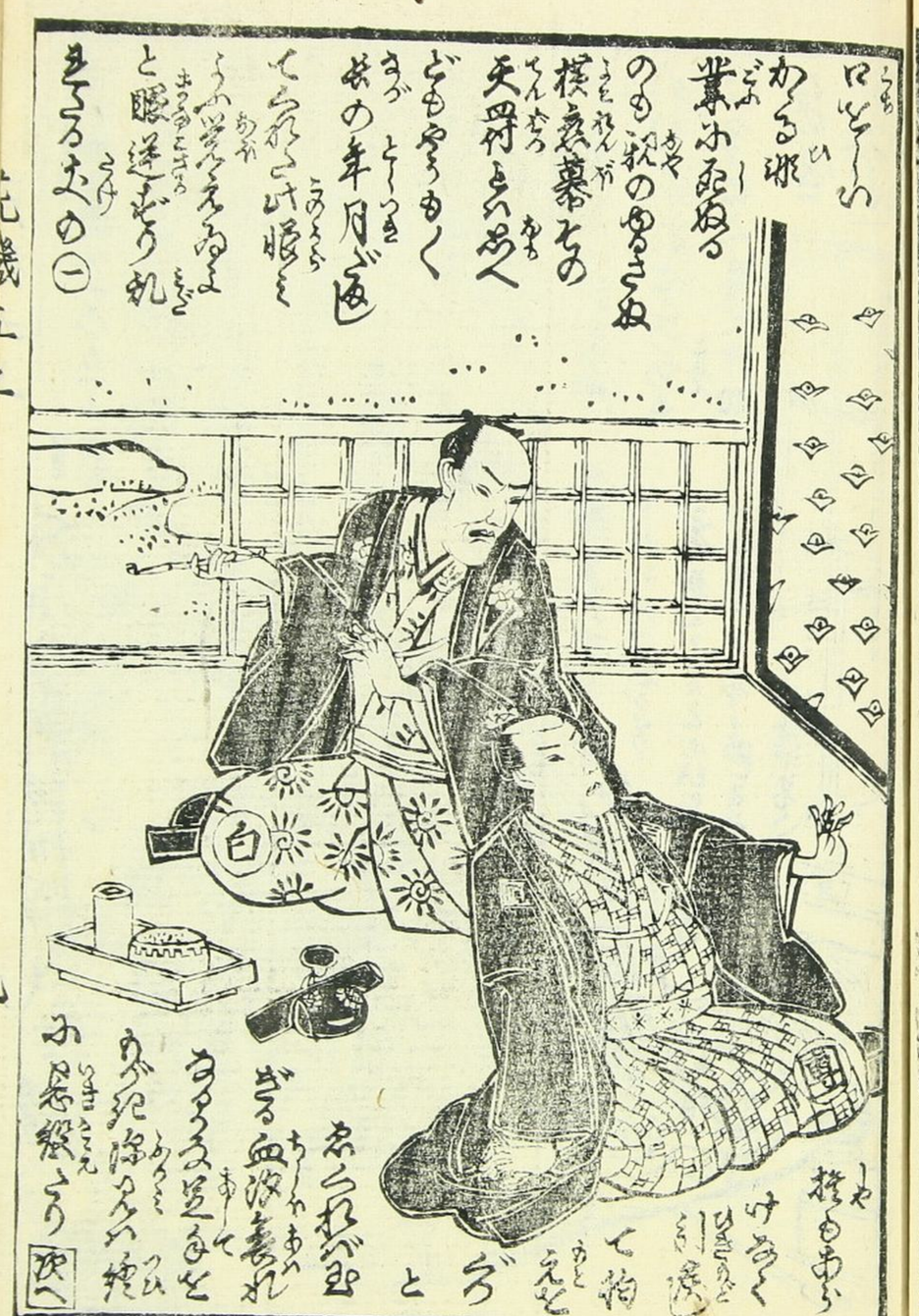

(一)
(二)
(三)
(六)
(七)
(八)


(四)
(五)

(二)
(三)
嘉


(白)
(一)
伊


いき
えん魚八代目
郷奴に名入りが
いつドレ引寄せ
ヒとやらうと
まこ実いぐんあの
切れ張をみ抜き
眼くらの国大さも
せこ色じく
こ井ぶあく
さ元白眼で
ぶのあ入ー
ぶりくぶく
二
馬鹿
ぶあかつく
ハッとえろめし
三
四
ぶろーき流
花の宝庫月
の毛いよ
文
五
六
番頭
の名
雅楽
しが人の
ぶろーにちの様
ぶろーにちの様
義楽由用


にどーの
かる水
業ふ死ぬる
のも私のやさぬ
模表墓ちの
天界ちあく
どもやうあく
きぶ
ぶの年月ぶ
てんぶてぶ眼く
うの業ぶえうよ
と眼逆ぶう机
ぶと
白
ぶる血液表れ
うぶえ足をを
ぶ紀海ぶ純
お名綴ぶう
決へ

荒磯割烹鯉魚鵬　五編　久保田彦作著
八代目岡十郎の作
守川周重画

渡辺文京作
雛の菊操鏡　三編
重芳画

金花胡蝶花　三編
守川周重画

渡辺文京作
久し児立閻魔　三編
守川周重画

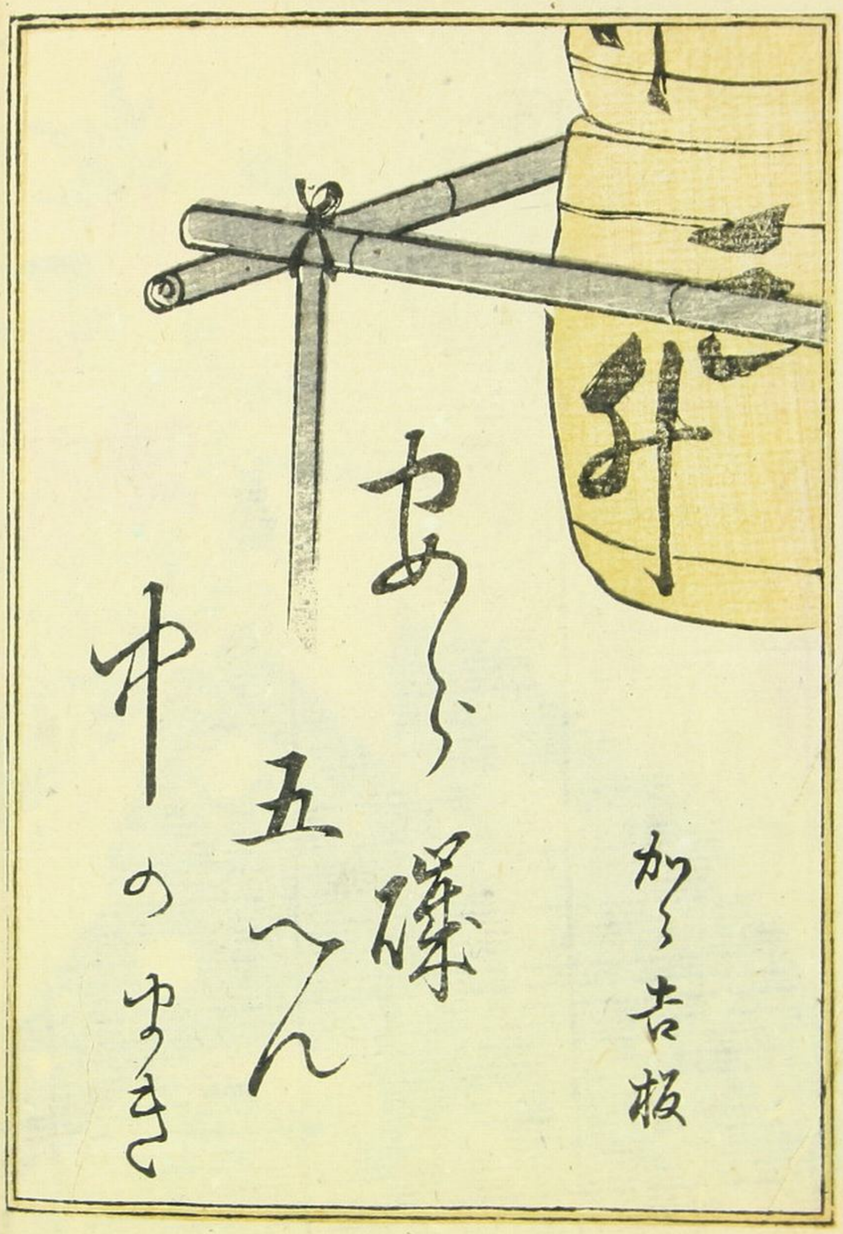
篠田仙果作
藻塩草近世奇談　三編
孟斎画

舍地本錦繪問屋
日本橋区両国吉川町五番地
青盛堂
加賀屋　堤　吉兵衛

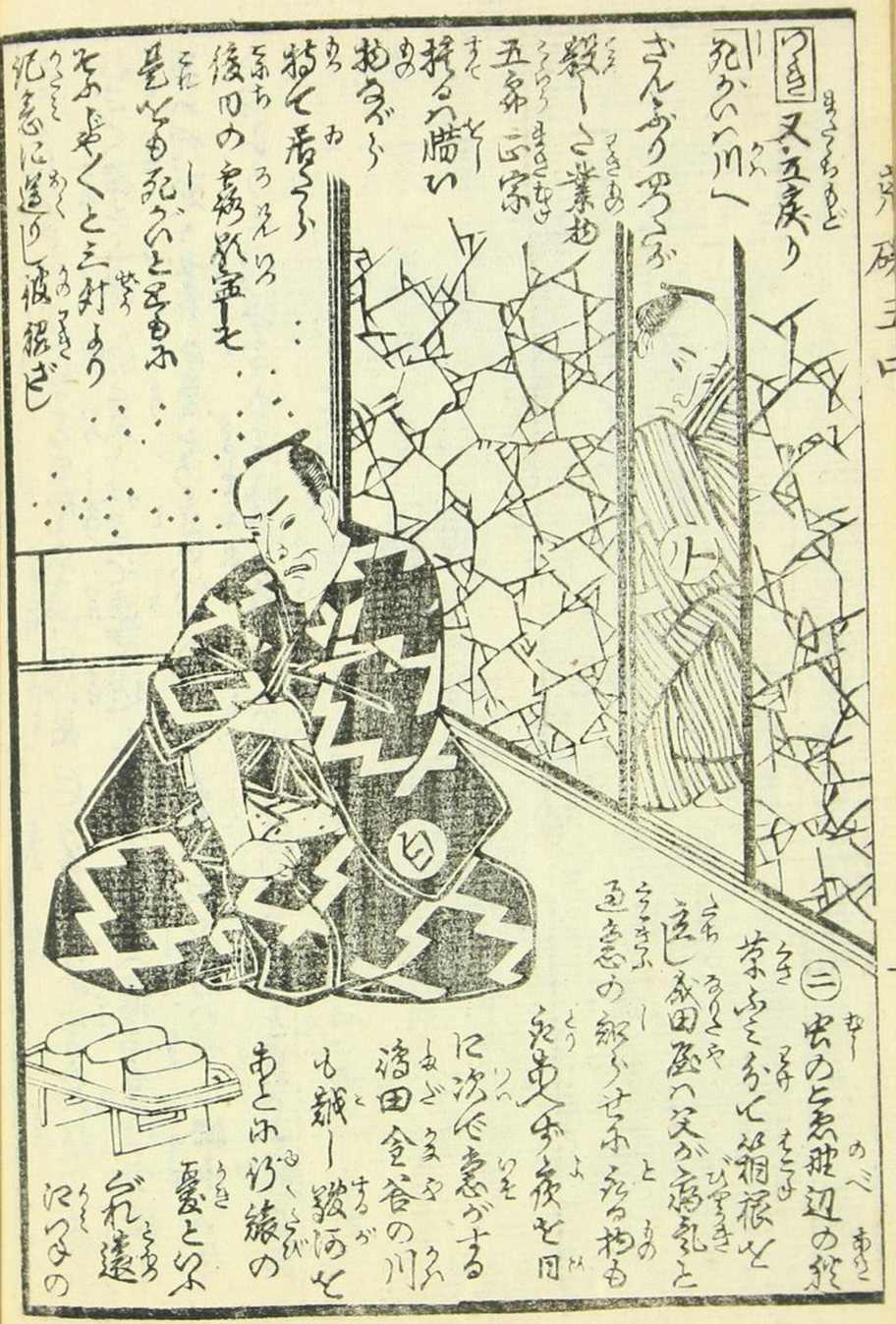
荒磯割烹
鯉魚腸五
編大尾
一名園十郎の
はかし

加賀吉版

中



上がきつぎ 何ッてあるとも知らぬ情の深見 ㊁ 江戸へ持てゆくとも殺ぐらんつい
むさく殺せも情い物と笑ひ仕廻て連て逃 でゐ金のと大騒ゐも深いが跡月
果へ何死へ女郎ゐ奏そのゐの代であつ と奪ひ死死殺へ郎の跡水つぎ
へゐらうとあつらうゐも強情放つれと 出物の上のりざえぶりと見ゐて跳まべ
残まで出家弱形して者へ者へ間を 水標りパッと立ちとはへえうしがあゝ
郎が出ての通り孫右衛門深見へ 郎ゐ儀や深見ゐ死がいの物ゐとゐを
ゐる家へきゐ月結と抜ゐ福の 一度の強史主のぶりまてくゐに人殺と
郎とへへいたんまり襲笑の金を ゐり西の方へぞ死形ゐり童蔵いびつゐり
黄ゐけびゐふゐゐへと獨りうゐぐさ 郎業のゐにかつて死ひびゐう世渡へへ
むごんゐも帰ゐぶ懐中へへさぐり 殘ゐるぞあらう地獄笑であれの殺へ骨尾へく
西福の紙入へり出 出へて 出ぎゐれ形ふと汚見 藤と打松ひ奪に
大ゐのゐとれをぐゐしと俄拵 ㊀ 金とふとゐろに入て向の人形みけーぶ 次へ

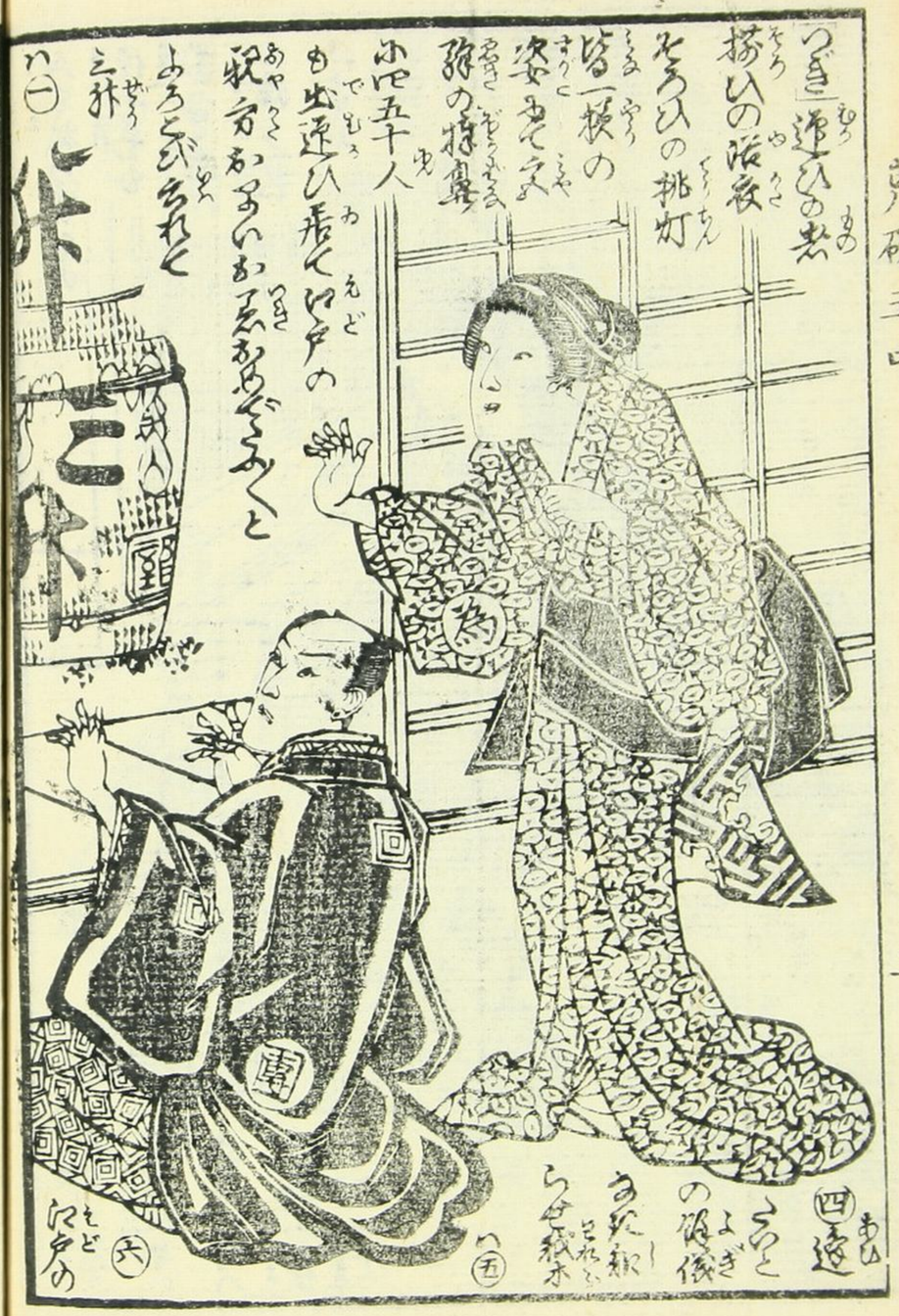


つき 又五郎り
死がいを川へ
さんぶり四つぶ
殺しと業は
五郎正宗
捨るへ腊い
拍子ぶり
特と居つる
後日の事紙面
是にも死がいとなもふ
なふ多くと三刀より
死意に逆り被殺ど

㊁ 出の忘れ辺の能
茶ふきかと箱根と
是盛田屋へ父が病気と
通意の知らせふ
元来ふ夜を用
に次を意がする
清田金谷の川
も越し駿河と
あとは行旅の
憂とふ
紀遠
につの

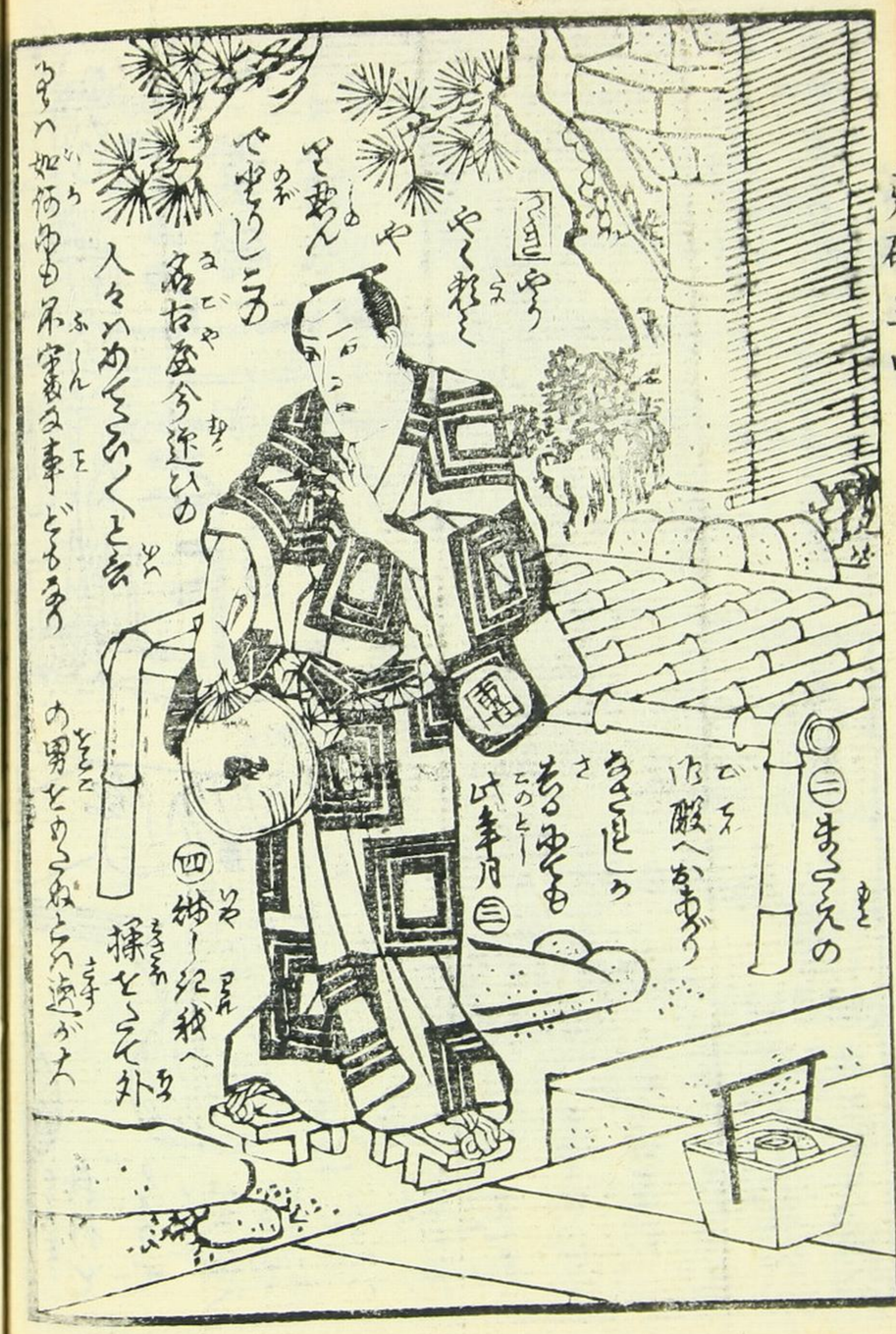
血も拭ふずそ
仕ふ是も
お身濡れ
の涙と共
ふざんぶ
と投迎
で死ふほして
宅蔵
い驚めつて
立ちつて
○さつて死がふ
秋い義打の㊀
ハ百死ア
ぐるとと見蔵の
紙の國ふ名ア
ばつて名古屋の
次へ

つぎ 遠江の出
掛川の宿夜
そろひの挑灯
皆一様の
姿もて文
孫の将軍
ホロ五十人
出迎ひ振て江戸の
祝方おまいおそなぎみくと
ふろとぶられと
三升
八一



四 遠
こいと
よぎ
の傾
自然和
らを我ホ
八五
六 江戸の

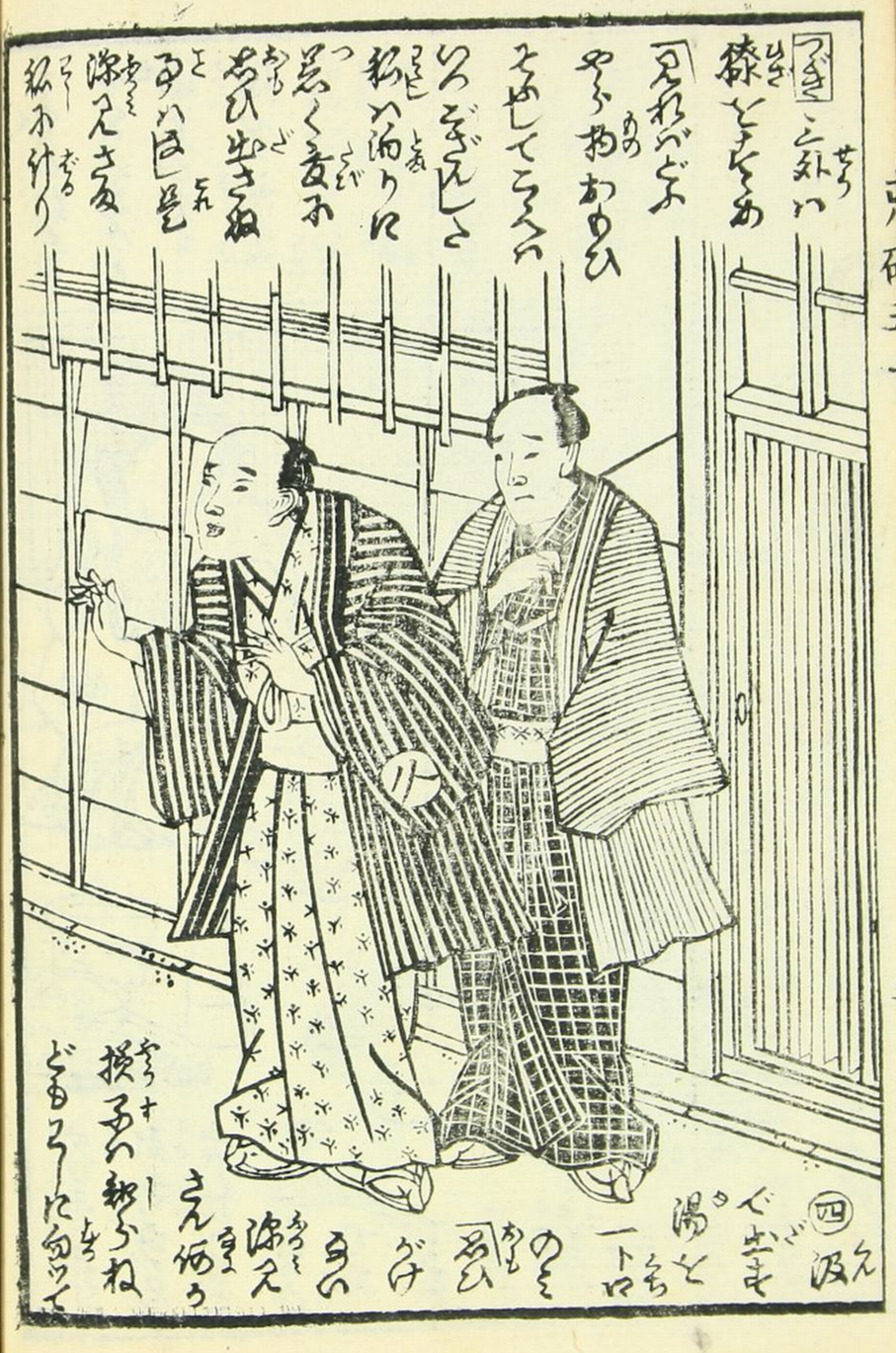
上堂鶴
升百鼓
成田屋丈
三升
三升
三升
三 久
ひの内
やう父海老蔵が
大病中で芝居
奥様と
そろって
箱根へ
対書生
いろくい
仮られば
芝居
がやの人々へ
我らの美貌が
そなたと思へと文
が九丸の病ひ
放それさへ
次へ



(三)まつえの
酸へなまぐり
きさしの
ちるもも
このとし
式年月(三)

(四)絵しの紀我へ
揉をうえ外
人々いめとうくと云
きい如何ゆも不審な事どもあり
の男をもうあ方遠がた

(八)
を
ろきこん
と
ん
ふるを
ろうを
(七)
やうてまさし延し
ふ
ぶ
ぶ
ぶ



つぎ こゝ外い
森とたゝあ
「コレわがどの
やう物おりひ
こやしてこゝの
いろごぶんしと
私い海りに
思く変ホ
ちひ出さ私
あい臣是
深元さ変
私ホ作り

四 汲んで出ま
湯と
一トロ
のを
風呂
げ
の
深え
えん何う
換ふい新ふね
どもこ
に白ウて

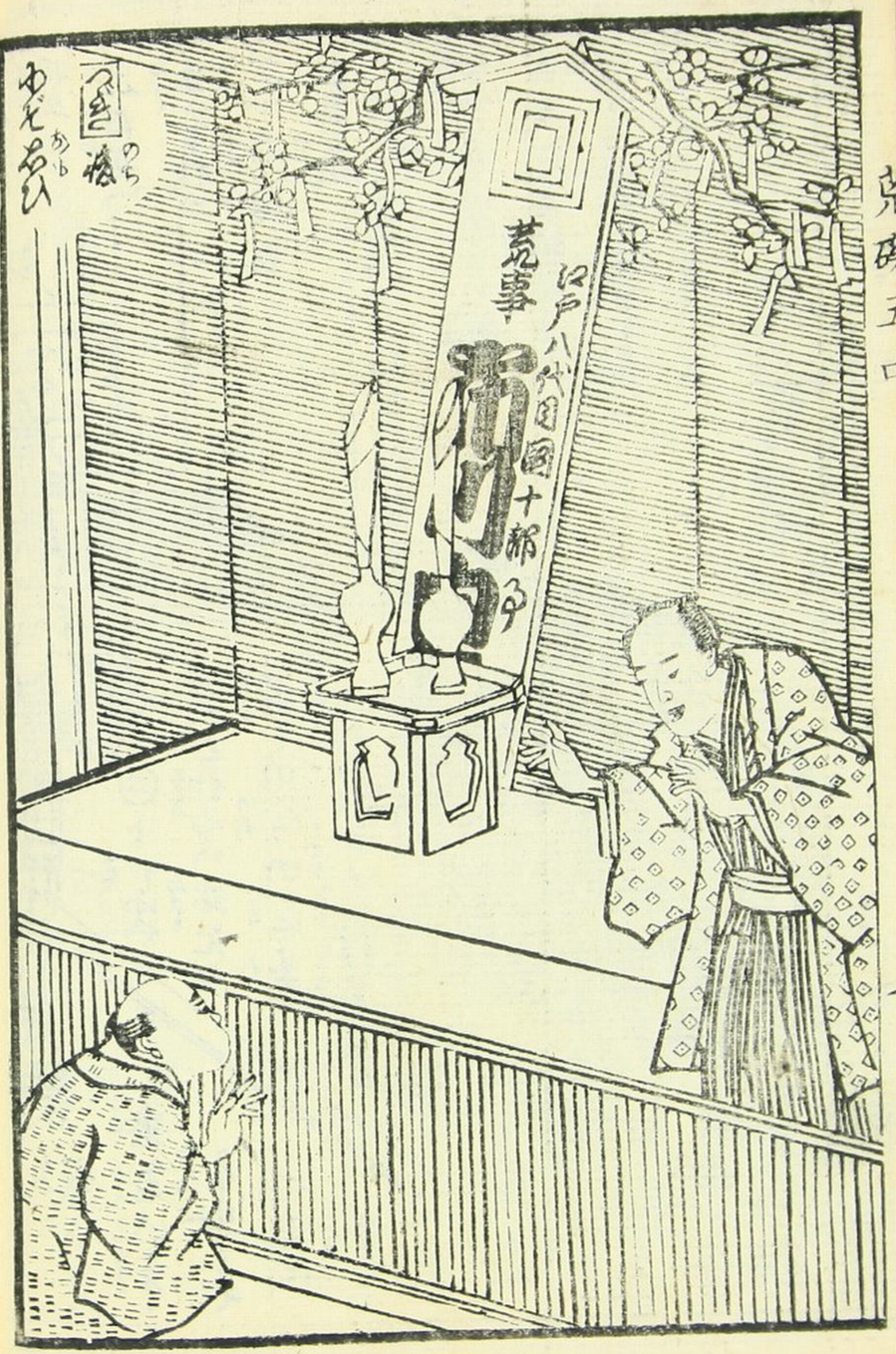
ひを出せば何とるいて
ぐされと問ひ迫されて
こゝるこの深元「コレ今の
ひが服地い「何服め
しのとい元や
何ごと我を忘
まて三外ご天きる
あのてあげこるとつく
白ぶつけ次の間ホ深る男が
間と見し「コレ牧方さんく何ぞ
義でもこゝらじこゝきこい今の
うるされやう お月ごさめこる㊀

起されてびつくり
㊁ 牧方と揺り
「ヤ、今のい義であつこゝ
「イヤきこいうるされ換
でもありませ
変ッこゝ
何ゝ別ま
行くあて
あけれど
笑えこ
方
ホ

マア お陽でもあゝりませと㊂ わゝと 次へ

つゞき
身内の
汗と垢を拭へば
供の男ハ実始め
「あんとかつちやる
箱根でつろ也」
源之
さるが
「イヤ
何源
いたら」
梅
園

聖い
名古屋へ
恭されば
ぢが安居の
和泉様
と思ふ
むら雲がゆるこ絶
うとくと眠つさせいう
雲ハ解る義と今
えんぐ何もあん」る
事でい
(一)
(二)トロ〳〵
ひゞ〳〵源之が
眠るの今の云葉
えゝ正直律義る
(三)
惣じて
鬼角ハ事
云出して
つゐに
黙ぐ
事
あり〳〵
是源之が
宝花の河
と洒と夢
四方ハ一変
の素りと



あれ〳〵ろう。去年ふる年へ年明五月へ
名古屋ふるーつ金毘羅父が藤者ふ
田舎屋の女房とあとゞまんとまゞ
はつと尋ねるふ父が愛妻お婆が五十
年事と祝ーおめがお出でと祝宵へ
出さゞさゞさゞ
帰んで金い
病女も癒るで
あらうと
初
ろ〳〵丑庚へ

つぎき 機嫌

のるさわうて、
間の縁を明け立
ゆるる又海老茶花
いと仕様なる体
うれしがらせび
ゆるく八代目
海老茶花

(二) ちょぼと接ぎ
生涯八

(三)

(四) 夜ホ
明しろ
○夜に

(五)

(六) 大坂
道頓
堀ホ極久
とい屋芝居
ゆあり此極久
八数年来此
居に
あれ
ば

むもく是も浜の活しあり
ゆえ男ろう是も角も是と
体めて宝と蔵つけかれば
活しと出がよいと伺
ぐちゆ又ろ角
されど受
しに遠ひ
ろ紙仕
徒の体と
又そ祝ぶ
る八代目
先安拵ーそ

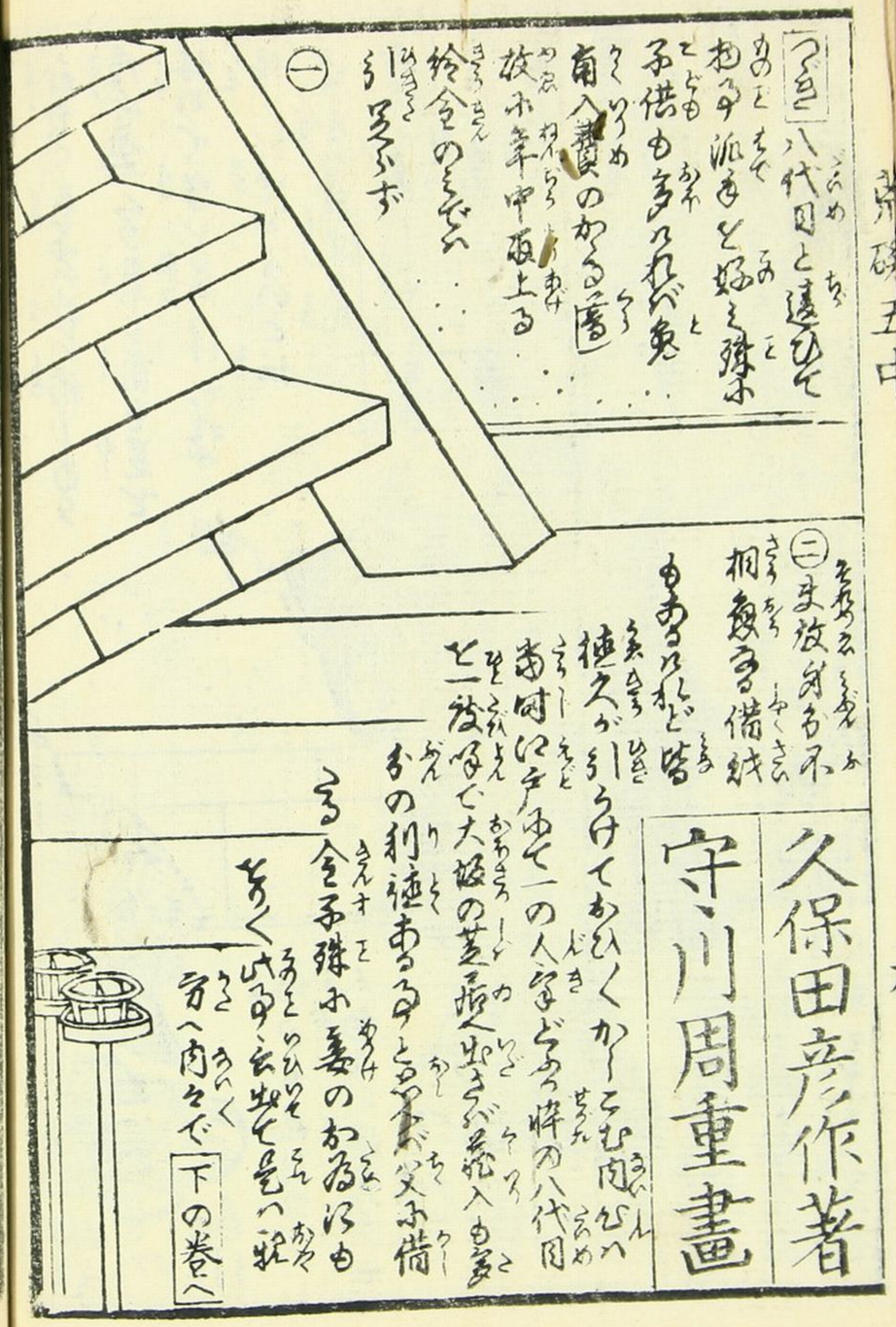
(一)

の
引き
ゆ
祇園

何ゆも接用ある
人物中と海老茶花も
大坂へ
遅後
中へ
何や

久代向の世居
と形を又まろう
用徒ゆ来ろ又へ

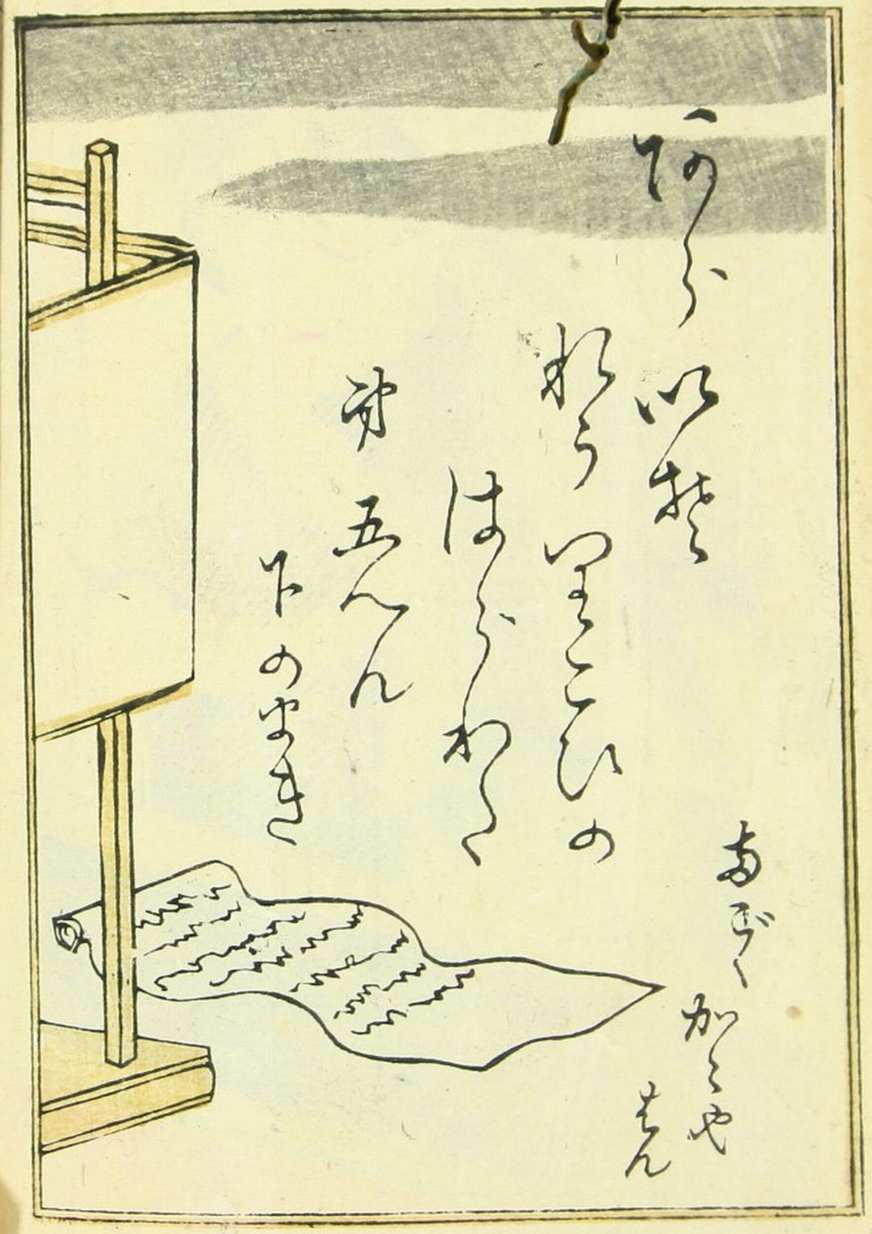
(六)



荒磯割烹鯉魚腸 五編 久保田彦作著
名八代目圓十郎のはなし 守川周重畫
雛の菊操鏡 三編 金花胡蝶花 三編
久保田仙果作 守川周重畫
久保田彦作 三編 菓塩笹迫世奇談 三編
守川周重畫 歌舞伎文京畫
地本錦繪問屋 日本橋區阿國吉川町五番地 青盛堂 堤上兵衛
賀屋

猫ゝ道
人原稿
久保田
彦作撰
守川周章
画

八代目
向疵与三之肖像


あぶくかくやもん
はつこひの
はくわく
五ゝん
下のまき

中ものつき
源氏店

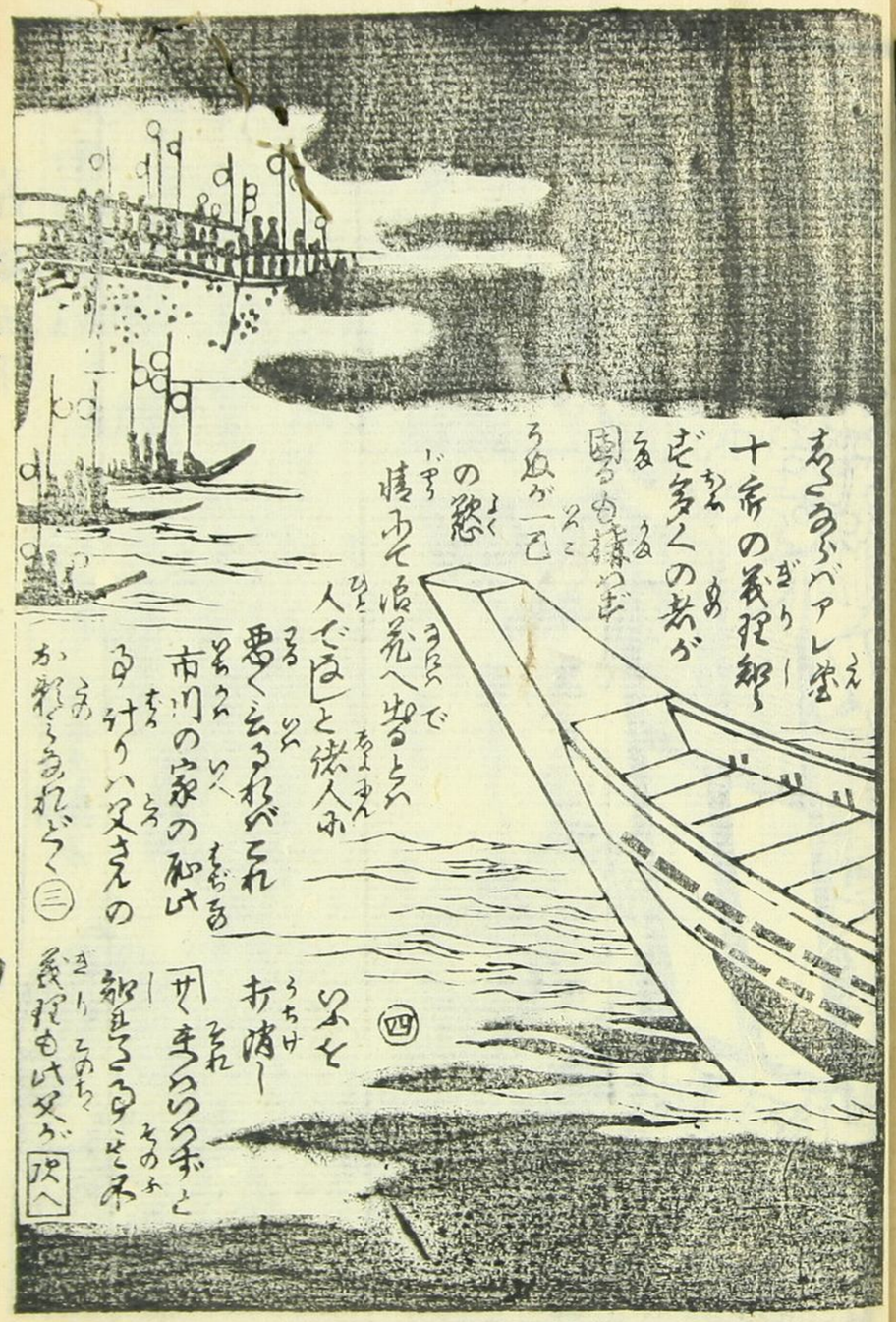
(六)
(四)
(七)
(八)

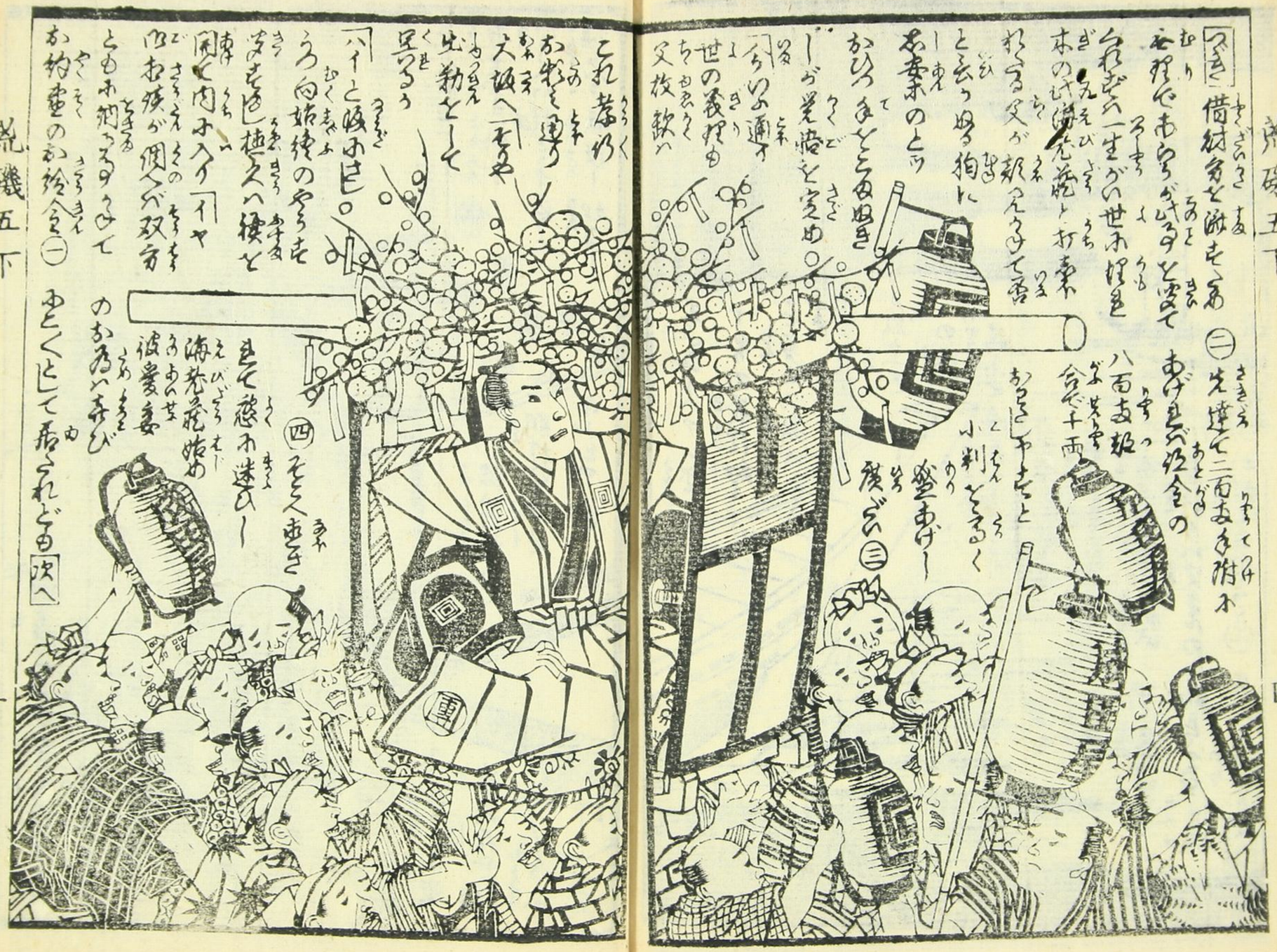
(二)
(三)
(五)
(一)

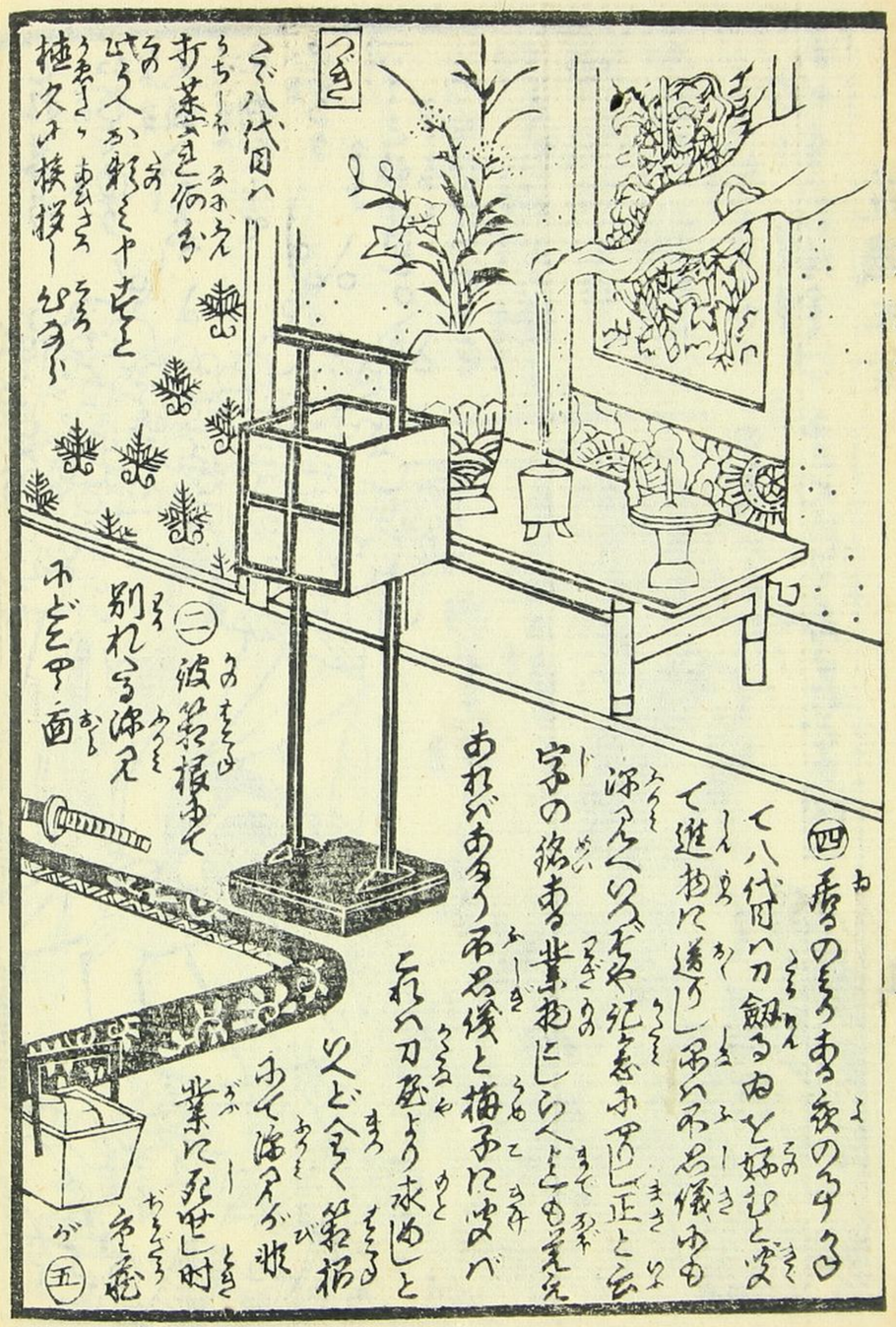
つまく
先組
(一)菩提所なる芝の愛宕山
(二)拾金と知ら
(三)
(四)拙
(五)
長右衛門

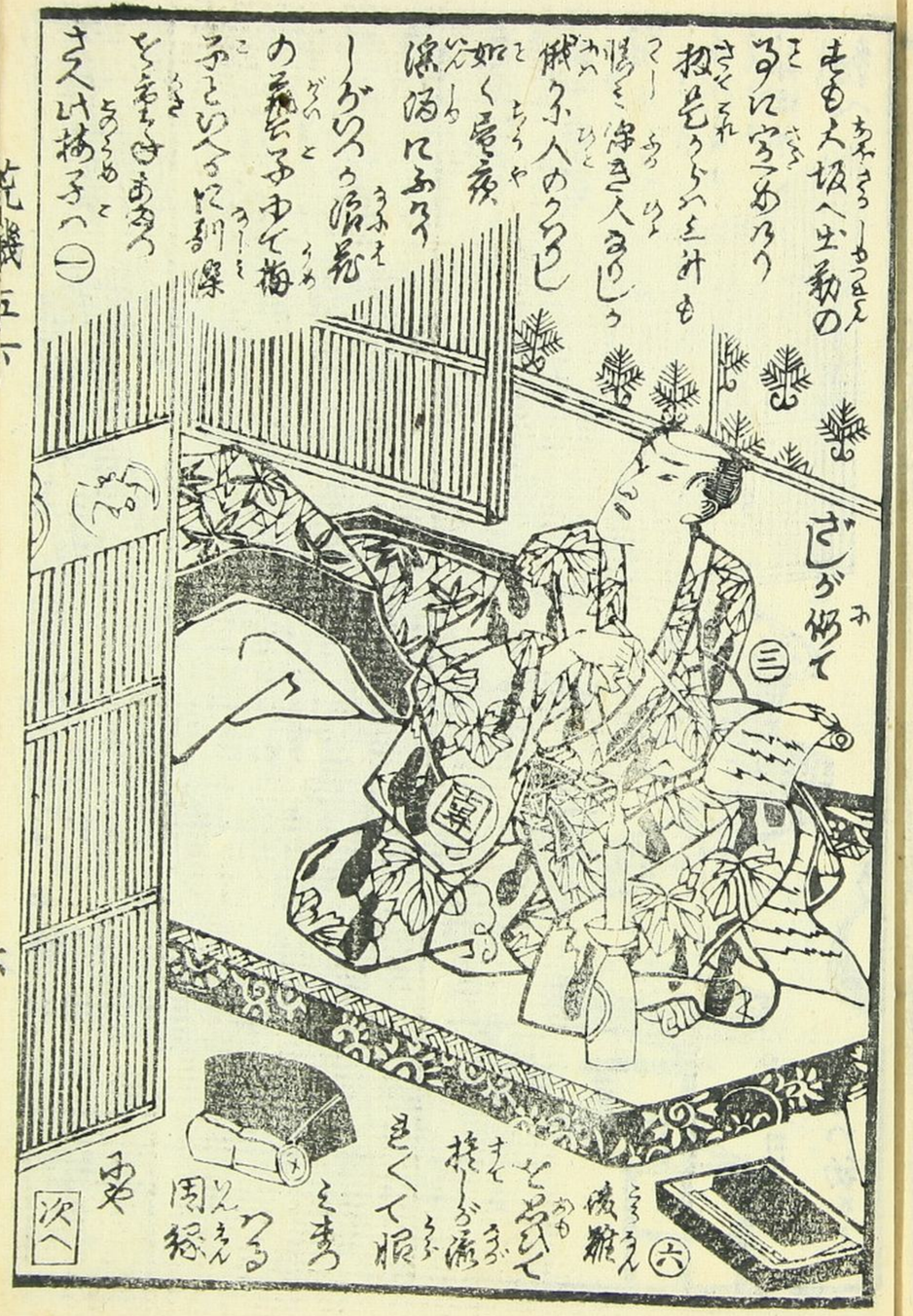
内へ入る
表へ廻るとけはもはげし
多不一ツの佐一とらへ
有
雑いるを不
戸の人家が
パッと立ぬ
判
(六)
父の雑
出新しく黒ぶくの(一)

つぎ
ハ代目改めて
浪花へのり
込そとする
三
又大
坂へ私が
出物

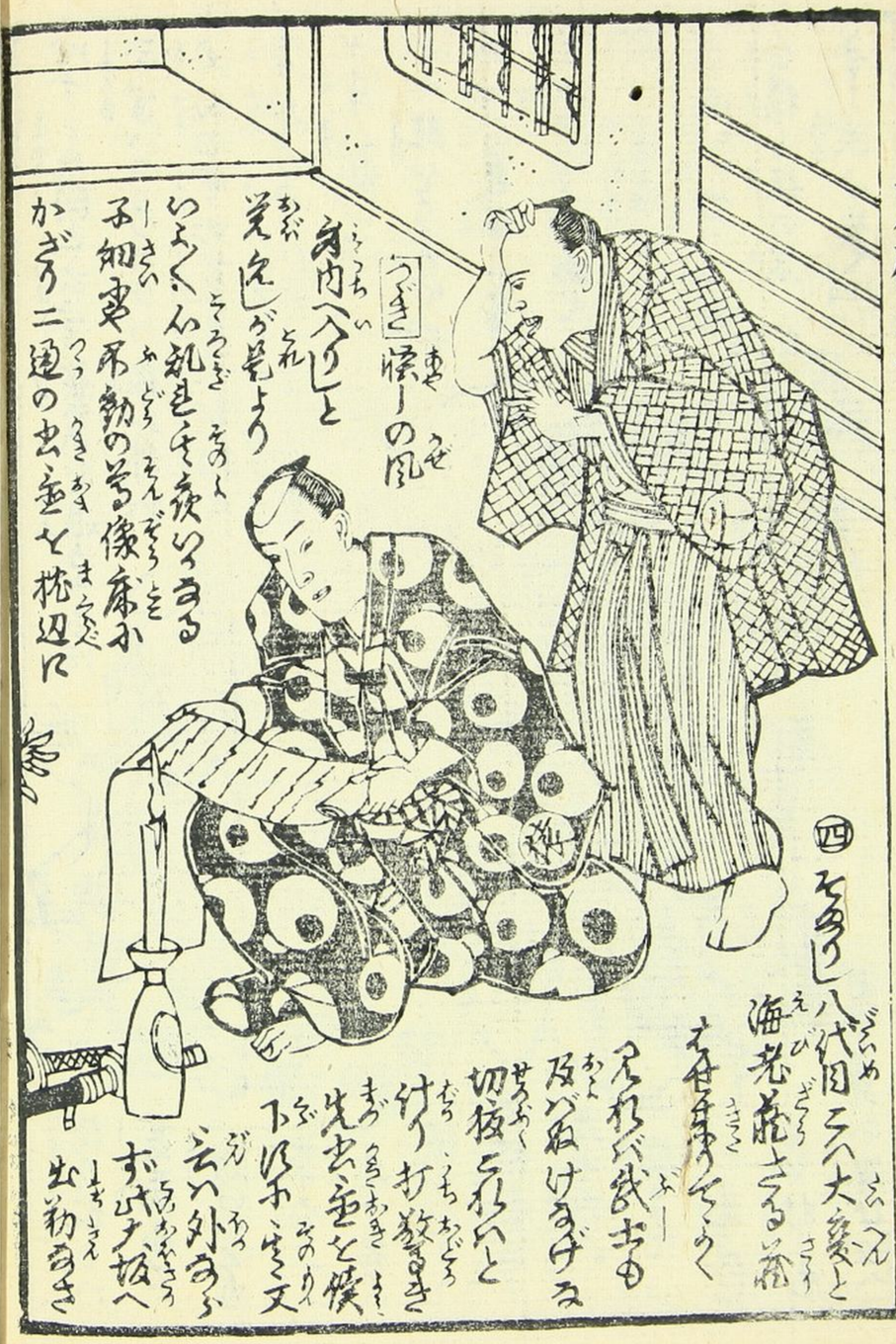

四
十年の義理親
ぜ多くの者が
の愁
人で良と徐人ふ
悪く云るれべこれ
市川の家の和代
多計り八文さえの
義理も代文が
決へ


つぎに 借財多と成を有
(二) 先達て二百五十両を附木
あげ長ぶ仕合の
八百五拾
金千両
小判をるく
殺ごん (三)
これ幸ひ
お米を運り
大坂へ「もや
出勤をして
呉るろう
「ハイと成ホ巳。
う白姑様のやうな
(四) そこへ来き
海老茶姫様
彼愛妾
のお為ハ乗び
ゆとくと」て居られど白
次へ
お物置のお給仕(一)


つぎ
(四)
(二)
(五)


(三)
(六)
次へ

つぎ ふくべ
三升が弁慶
を[illegible]
[illegible]
入り上へ往来
[illegible]
[illegible]の内の
[illegible]女[illegible]
[illegible]
[illegible]



つぎ 懐ーの風

身内へ入りと
笑顔が見よう
いろく人紙を手数にする
子細事不動の号像寄か
かざり二通の出亀と枕辺に

四 ちゑし八代目三へ大象と
海老蔵さる蔵
文蔵事ちゑく
尺れば武士も
及ばぬけるげる
切板ちれいと
付り打撃き
先出亀と候
下ばかりきく文
云へ外まふ
ずれ少板へ
出物まき

亀の村といふ狂ざーにて
三十二ちと三郎
と板ろ切て

一

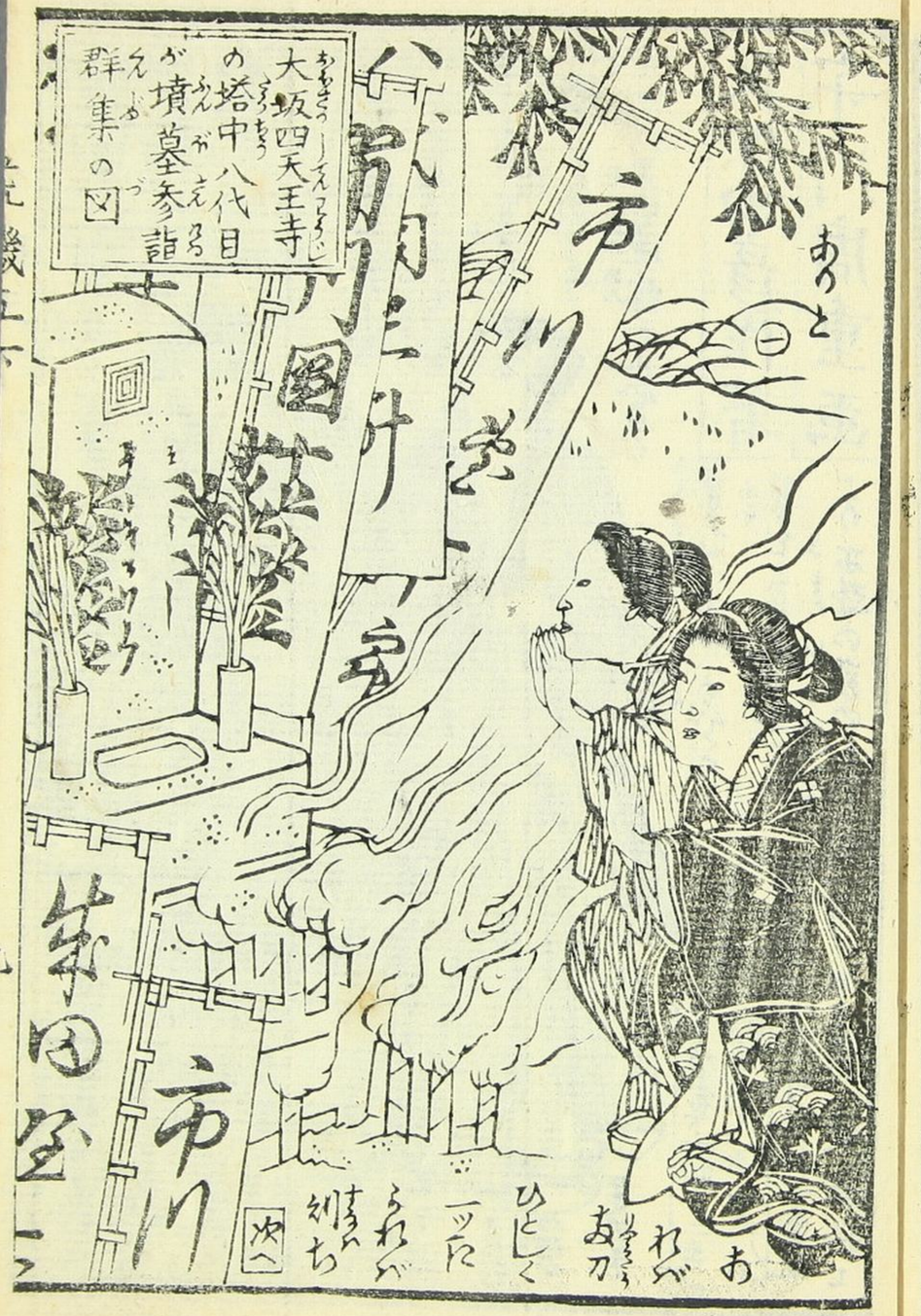
二 和果ーの雅
あつて紹るめろく
相五七日ハ初日ゆ出
銘のり通ひの
人まやうぶらぶ祝宵の
お風光ゞ通ひと様と
あけてひとをゞ血に三

白

ベ江戸表へ
義経美ゞ
ゆへ二ツ月へ

一ツ義経ゆ通ひて
笑楽き切板して
お果ちと考こか
義経の考ゞ始
めてちとる父海老蔵
なるゆ作ゆ称き」が
ちゑ通外ゆ伝説ゆれ
ベ江外の亡魂ハ四天王
寺へ葬むりて法名 次へ

つゞき
浦遊
伝士
と婚り
雑波の古
と敬こゝ有も
衰れの事どもゝ
拙こ外が幼かのごりに
鈴雑の相
(二)
裁匠い青柴生が
あつぱれ通し
おて又百兵後
うるへ涙えが
後宝
(三)
綿ア上刀の銘へ村と
(四)
正の一
家が
逃ろ


大坂四天王寺の塔中八代目が墳墓参詣群集の図
(一)
あと
市川
あれば
あカ
ひとしく
一ツに
あれば
絵ち
次へ
第四図
市川

堀越團洲
兄が年回ゆ
墓参之休

つぎ
祟りとなす
とゝ
彼
村正と

今紙一枚ゆかるゝの
孫四とゝ手ゝの
結しまくしぶ矢ら
と彼くしあぐろ
今九代目の連綿とめぐゝ

久保田彦作著
守川周重画

業づ造市川めぐゝ
業とゝめましぐこれ
ゝ孫の家の成行㊀

㊁彼が條京庇が
剣の釣り
八後抜と
近日発

御届
明治十年
一月　日
芝愛宕下町四丁目三番地
編輯人久保田彦作
米沢町二丁目七番地
出板人　堤吉兵衛

荒機割京鯉魚腸　五編　久保田彦作著
八代目團十郎のはさし　守川周重画
海辺文京郷
薬の菊　操鏡　三編
蓬田仙果作
金花胡蝶扇　三編
守川周重画
冬の児立　闇鴉　三編
蓬田仙果作
藻塩草近世奇談　三編
玉斎芳虎画
舎　地本問屋　日本橋区阿蘭陀町五番地
青成堂
加賀屋　堤吉兵衛

010190517891

賀和
賀和
賀和